

## ピンダロスの頌詩における神話・伝説と 競技との関係

村 山 鉄次郎

### はじめに

以前に、明治大学教養論集305号で古代ギリシアにおける馬の競技について論じた際に、古代ギリシアの詩人ピンダロスが、競技の優勝者を賛えて多くの祝勝歌を作ったことについて触れ、なお継続して研究したい旨述べた。

この論文で扱う詩のテキストは、Sir John Sandys によって編集ならびに翻訳された、希-英対訳 THE ODES OF PINDAR である。

それらの祝勝歌は、オリュンピア祭、ピュティア祭、イストミア祭、ネメア祭のいわゆる4大祭などの勝者を祝って、たとえばオリュンピアのアルフェイオス河のほとりで、あるいは競技者が故郷へ帰還した折に、館の前で大勢の歓迎する人々を前にして、堅琴やフルートなどの伴奏のもと、詩人の指揮によってコーラスが歌った<sup>(1)</sup>もののようである。

詩人はしたがって演奏にまで責任があったけれども、まずはコーラスのための歌詞を作ることが主なる仕事であった。その歌詞としての祝勝詩を、ここでは頌詩と呼ぶことにする。

Sir John Sandys によれば、この詩人は故郷のボイオーティアから出て、アテネで叙情詩の作詞法を学んだ。さて、詩人として作品を最初に作ったときに、同郷のボイオーティアの女流詩人コリンナによって、神話や伝説を織り込まなかったことを指摘されたという。その後にピンダロスは極端に多く神話・伝説を盛り込んだ。彼はすぐにコリンナの批評を受け取ることになる

「種は、手で蒔かなくてはなりません、袋ごとではなくてネ」<sup>(2)</sup>と。

したがって、詩の中に「神話・伝説」が盛り込まれるのは当然のことだったのであり、当時のギリシア人にとっては理解しやすく、また詩の価値を高めることにもなったと思われるが、時代を経た現代のわれわれ一般には決して解りやすくはない。

そこでこの小論においては、若干の詩について、おおよそ次のような観点からそれぞれの詩をみてみたいと思う。

- ① 勝利者の紹介
- ② 引用されている神話・伝説はどのような種類のものであるか？ また、それが勝利者とどのような関係にあるのか？
- ③ 勝利者の賞賛はどのようになされているか？
- ④ その他

### 人名・地名などの標記について

ギリシア語は母音に長音や短音があり、またアクセントについても曲アクセントなど特殊な発音があるせいで、人名・地名の標記では各翻訳本でまちまちであり、戸惑いを感じる。たとえば、ヘラクレス、ヘラクレース、ヘーラクレースという風にある。

この小論では冗長を避けるために、普通に通用しているものについてはできるだけ長音標記をやめ、短音標記をとることにする。

また、φ (ph) のカタカナ標記については、神話に関する和訳本の多くが p の扱いなので、引用の場合は p の扱い、もともと古典ギリシア語には f の発音がないので、π と φ の違いをはっきりさせるために、本文では f の扱いつまり、*Αλφειος* = *Alpheios* をアルフェイオス、*Δελφοι* = *Delphoi* をデルフォイというようなカタカナ標記を採用した。

また詩の部分については〈 〉を用いて、その内容を示すことにした。

## 取り上げる詩

- 1) オリュンピア 1 シュラクサのヒエロン (騎馬競走)
- 2) ピュティア 1 アイトナのヒエロン (戦車競走)
- 3) ピュティア 2 シュラクサのヒエロン (戦車競走)
- 4) ピュティア 3 シュラクサのヒエロン (騎馬競走)

今回は、ヒエロンの騎馬競走と戦車競走の頌詩のみに限定した。他の多くの作品も、大なり小なり似通ったものであるから、とりあえずこの代表的なものとして、上の4編を取り上げて見た。

### 1 オリュンピア頌詩(I)

#### シュラクサのヒエロン (前476年の競馬の勝利者)

##### 1. ヒエロンのひととなり

シケリア (シシリー) のゲラには、アイネシデモスの子供として、ゲロン、ヒエロン、トラシュプーロス、ポリュゼーロスという4人の兄弟がいた。

ヘロドトスは、「長兄のゲロンは、ゲラの独裁者ヒポクラテスのもと親衛兵を務めていたが、戦闘における功績によって全騎兵部隊の長官に任ぜられた。ヒポクラテスが7年の統治の後、シケロイ人 (シケリアの先住民) 討伐の折に戦死した。そのとき、ゲロンは表向きはヒポクラテスの遺児を後援すると見せかけながら、政権を奪ってゲラの支配者となった。やがて、シュラクサイの政変に乗じてその町の支配者になると、ゲラの統治を弟のヒエロンに委ねた」<sup>(3)</sup>とその著書「歴史」の中で述べている。

したがってこのヒエロンは、このようにしてシケリアの町ゲラの支配者となったが、「もともと彼等兄弟の先祖は、テロス島 (ロドス島の西でクニドスの南に位置する島) の出身でゲラへの最初の植民 (前690年頃) の一員であった。この子孫の一人テリネスはゲラの「地下女神」(デメテールとペルセポネー) の祭司の地位を手にいれ、以後子孫たちも代々その地位を継承していた」<sup>(4)</sup>。

ヘロドトスが述べているように以前に騎兵部隊の長官を務めた兄ゲロンか

ら、弟ヒエロンにゲラの支配者の地位が譲られたという事情から察すれば、ヒエロンが優秀な馬を持っていたことも当然のことと頷ける。

この時優勝したヒエロンの持ち馬こそ名高い名馬フェレニコスだといわれている。この馬は、これ以前にピュティアで、前482年、前478年の2度にわたって勝利を得ており、オリュンピアでは、前476年、前472年のオリュンピアで勝っている<sup>(5)</sup>。

## 2. 引用されている神話・伝説と勝利者の関係

以下、詩について概観するが、大意を述べれば次のようである。

〈……シュラクサイの君主、戦闘的な騎士、彼のために栄光が、以前にリュディアのペロプスによって建てられた英雄たちの新しい家において輝く；そのペロプスに、かつては、大地を激しくゆるがすポセイドーンが心を奪われた。クロトー（運命の3女神の一柱、紡ぐもの）が大鍋の清めの水から、象牙で輝く肩を持つ彼を引き上げたときに……。〉とピンダロスが詩うとき、ヒエロンが「地下女神」の祭司の家系であることをうけているのだろう。

神話によれば、ペロプスの父タンタロスが、不遜にも神々を試そうとして、息子のペロプスを切り刻んで大鍋で煮て、神々の食卓に供した。そのとき他の神々はすぐに気付いて食さなかったが、デメテルだけが心痛を抱えて放心状態で、肩の部分を呑み込んでしまった。タンタロスは神々とゼウスによって厳罰に処せられるが、ペロプスは神々によって大鍋から助け出され、各部分をつなぎ合わせて生き返らせられる。

欠けている肩の部分が象牙<sup>(6)</sup>によって修復され以前より美しくなって生まれ変わり、その美しさにポセイドンが心を奪われたことを、その成り行きを運命の女神クロトーが紡いだこと<sup>(7)</sup>を詩っているのであろう。

ペロプスはやがて、王女ヒッポダメイアを賭けて『オリュンピア競技の起源伝説の一つ』である、『ピサの王オイノマオスとの戦車競走』に挑戦することになる。

詩は続ける〈ピサの王には一人娘ヒッポダメイアがあり、彼女が婚期に達しても、王は求婚者に難題を課し、すでに13人の求婚者が命を落としていた。

その難題とは、花婿候補者は王女を自分の戦車に乗せてピサからコリントスのポセイドーンの社殿目あてに馬を馳せる、オイノマオス王ははじめピサのゼウスの祭壇に犠牲を捧げ、このハンディキャップで、武装したうえ戦車で彼等のあとを追ひ、もし途中で追いつけば殺してしまう、首尾よく逃げおおせれば王女をやるというものであった。

ペロプスは御者を買収して、王の車のくさびをはずさせ、戦車を転覆させて王を死なせ、約束通り王女を得、やがてピサをも手に入れる。そして王女ヒッポダメイアは、勇敢な行いの息子6人を彼のために生んだ。ペロプスは今は素晴らしい犠牲に与り、アルフェイオス河のほとりオリュンピアの地にまつられて安らいでいる<sup>(8)</sup>。〉

ペロプスの伝説は、オリュンピア競技の発祥に関わる物語のひとつとしても考えられているものであるし、また、戦車競走を取り上げることによってヒエロンのオリュンピアでの騎馬競走の勝利を暗に引き立てているのであろう。

### 3. 優勝者への賞賛

ピンダロスは〈オリュンピアほど栄光に富む祭の場所はない〉と、オリュンピアのの地をまず誉めたたえ、〈そこから詩人たちの思いが織り込まれた賞賛の歌が来り、ヒエロンの豊かで幸せな炉辺にたどり着いたときに、彼等はクロノスの息子のことを声高らかにで歌う。〉

〈ヒエロンは実り豊かなシケリアの王として君臨している。われわれみんなが友好的な食卓を取り囲んでいるときにしばしば湧き起こるような非常に楽しい旋律の中で、歌の精華に彼は喜ぶ。〉

〈さあ、ドーリア人の豎琴をその休息所から取りなさい、実際にピサ（オ

リュンピアの所在地)とフェレニコス(優勝馬の名)への心地よい思いとが汝の胸に甘美な默想のひとつきを投げかける,あの時はアルフェイオスのほとりで,レースでは鞭を必要とせず,その四肢を駆使してかの馬は疾走し,かの馬の持ち主,シュラクサの君主にパワーをもたらした。そして彼のために,リュディアのペロプスによって以前に作られた新しい英雄たちの家で栄光に輝く,好戦的な騎士であるヒエロンに……。

詩人は,ヒエロンが王の地位にあることを賛え,その地位の安寧を祈っている。

さて,このヒエロンに関してであるが,彼はピューティアの頌詩でまた3編に登場することになる。

こうした頌詩の表現では,ヒエロンの騎馬競技における勝利の賞賛はさておき,競技の実況や技術的詳細に関する表現は全くなく,ヒエロンの属する(この場合支配する)都市や一族に関する伝説を含めた表現が,もっぱら主流を占めている。

詩人はしかし,死すべき人々(人間)の誰にとっても最も輝かしい恩恵は,永遠に日々がやって来るという祝福だというのである。

また,「デメテールがペロプスの肩の肉を呑み込んでしまった」ということに関してであろうが,「ひとは神々を悪しざまに云うべきではない」と戒め,詩人自身も「神々が食肉の悪習をもっているなどと毛頭考えていない」と断わっている。

## 2 ピューティア頌詩(1)

### アイトナのヒエロン(前470年戦車競走の勝利者)

#### 1. ひととなり

このヒエロンは,前出のヒエロンと全く同じ人物である。前476年にヒエロンはカタナの住民を追い出し,ペロポネソスから5000人,シュラクサか

ら5000人移住させ、この新しい都市にアイトナの名をつけた。

そして次の前475年にはエトナ山の大噴火があり、その翌年の前474年にはクマエ（イタリア半島ナポリの近く）のエトルスキ人の海軍の攻撃を受けたが、これをヒエロンは撃退した。このように彼はアイトナ市の基礎を造ったことから、前470年のピューティアの競技会で、戦車競走に勝ったとき、「アイトナ人」として勝利の名乗りを受けたのである<sup>(9)</sup>。

## 2. 引用されている神話・伝説

〈黄金の堅琴<sup>(10)</sup>、アポロンとムーサイ<sup>(11)</sup>に所有される堅琴よ、楽しいダンスを始めるとき、コーラスが歌い始めるとき、汝は序曲を奏でる。

汝は雷電を和らげ、鷲を静める<sup>(12)</sup>。戦の神も槍を置き、心をなごます。レートーの息子（アポロン）と胸ふくよかに帯をしめた<sup>(13)</sup>ムーサイの洗練された技巧によって。〉これは神々にすら安らぎを与える音楽の優雅さを賛えている部分であると同時に、アポロンの司ったデルフォイの地域やそこから程近くにあるヘリコン山に故郷をもつムーサイを持ち出してピューティアの競技と祝勝歌の関連を示している部分でもある。

〈しかし、ゼウスが好まなかった生き物のすべては、地上であれ、海上であれ、ピエリデス<sup>(14)</sup>の声を聞くと仰天する。その中には、タルタロス<sup>(15)</sup>に横たわる百の頭を持つテューフォーン<sup>(16)</sup>もいる、彼はキリキアの洞窟で生まれ育ち、今はシケリアの、炎を噴き、溶岩を流すエトナ山の下に閉じ込められている。〉

〈ゼウスはかの山（アイトナ山）へしばしば訪れるというのが、ヒエロンはこの名をもらった都市アイトナの創設者として、ピューティアの競走場で、伝令官が『アイトナのヒエロン』と気高い勝利に関して宣言を行った。〉

また、この詩のはじめにアポロンを引き合いに出しているのは、ピュートー（デルフォイ）が、アポロンによって征服され、神託所が彼に引き継がれたと伝えられているからである。

そしてポイアスの息子フィロクテテス<sup>67</sup>が登場する。テッサリアのマグネシアの人であるフィロクテテスは、トロイヤ遠征のギリシア勢に加わり遠征した折、ギリシア勢はレムノス島に立ち寄り、土地の女神をまつる神事を取り行うが、その最中に、ヘラクレスの弓を持っていたフィロクテテスが蛇に噛まれ、その傷がもとで島に置き去りにされる。神託によって「トロイア攻略にはヘラクレスの弓が必要」と分かり、オデュッセウスとネオプトレモス（アキレウスの息子）が迎えに来る。こうして彼は弱ってはいたけれどもトロイア勢を破ることができた<sup>68</sup>、という物語である。

運命はこのように処方されていたのだとピンダロスは詩う。

### 3. 勝利者への賞賛や期待

ピンダロスはヒエロンとアイトナの市民のために次のように詩う。

〈それはそうとしても、神々はヒエロンの守護者となるであろう。私は、ムーサイが4頭立て戦車競走の勝利を大声で歌って褒めそやす間、息子のデイノメネスのそばに立つよう願いましょう。父親の勝利は息子のデイノメネスにとっても嬉しいものだ。この王のために、ヒエロンはヒュロス（ヘラクレスの息子）の支配の法律<sup>69</sup>に従って、また神の作った自由の助けを借りてアイトナを創設した。そしてヘラクレスの子孫たちはタウゲトス山の麓に留まり、テュンダレオス<sup>70</sup>の子孫としての栄光を担った隣人たちを繁栄させた。

すべてのものに栄冠を与えるゼウスよ！ アメナス川（その河口近くにアイトナがある）のほとりで、市民と王の両方に良き幸運を与え給え、汝の祝福をもって、ヒエロンとその息子が人々に名誉を与え、彼等をして平和と調和を促進させることができますように。

願わくば、おおクロノスの息子よ！ キュメ沖の海戦ではヒエロンによって敗北させられたカルタゴ人とエトルスキ人が故郷でおとなしくしていますように〉とアイトナの平和を祈り、

〈サラミスではアテネ人が、キタイロン山の麓ではスパルタ人が勝利し



た。これに比するに、アイトナの勝利はヒメラ（シケリア島西部北海岸）の戦い<sup>94</sup>である。〉とヒメラ沖海戦の勝利を賛えている。

〈羨みは哀れみに勝るから、高貴な進路を進みたまえ。人民を正義の舵輪で操縦せよ。どんな言葉でも汝の口から漏れるならば重みを持って運ばれる。唆されてはならない、わが友よ！ 狡猾な利得に！ 人々が死んでしまった時に、作家や詩人に秘密をもらすのは賞賛の大きな喝采だけである。

クロイソス<sup>95</sup>の親切で寛大な行為は色褪せることがないのに、無慈悲なファラリス<sup>96</sup>は厭わしい悪名に永久に打ちのめされている。

賞の第一は幸運である；第二は公正な名声である；だが、両者を見出し、獲得するものこそ最高の栄冠を受けてきたのである。〉

このように祈りや要望や教訓などが多く、優勝者本人に対する賞賛はきわめて少ない。

### 3 ピュティア頌詩(2)

#### シュラクサのヒエロン（前475 戦車競走の勝利者）

##### 1. ひととなり

これも当然同じ人物である。これはイントロダクションで触れられているように、南イタリアのレギオンの独裁者アナクシラオス<sup>97</sup>のシケリア攻撃をヒエロンの兄ゲロンがヒメラ沖海戦で破った折、南イタリアのロクリスもアナクシラオスの圧力から解放された。〈西のロクリスの少女たちが感謝の歌を歌う〉というのはこのせいかと考えられる。

##### 2. 神話・伝説との関係

この頌詩は、ピュティアの競技ではなく、イオライア祭の戦車競走を祝したものとされるが、取り扱われている神話・伝説に関しては最も難解な詩の一つである。

〈女神アルテミスがしばしば訪れるオルテュギアー〉<sup>98</sup>と詩うのは、ホメー

ロス賛歌といわれる詩の中で、母レートーがアルテミスをオルテュギア一島で生み、アポロンをデロス島で生んだとあり、もう一方で当時シュラクサには、アルフェイオス河とつながると考えられていたアレトゥーサの泉が湧くオルテュギアと呼ばれる島があったことが原因であろう。

〈ヒエロンはアルテミスの助けをもって、刺繍を施された手綱をつけた馬たちを彼の気高い手で導く。何故なら狩りの処女神（アルテミス）と競技の神ヘルメスとが両手でもって、光り輝く馬飾りを彼に贈る、ヒエロンは彼の馬たちを磨き上げた車のくびきに、つなぎ止める。同時に彼は、三叉を振り回し遠く広く支配する神（ポセイドン）の名を呼んで祈る。キュプロスのひとびとの賞賛は、アフロディテのお気に入りアポロンからも好かれるキニュラス<sup>44</sup>の名を響わたらせる。〉

ヘラに恋してゼウスの怒りに触れた結果、翼のある戦車の車輪に括りつけられてぐるぐる回る罰を受けたイクシオンの物語<sup>45</sup>が述べられる。

〈ゼウスの罠によってイクシオンは「雲」と交わったが、その雲からケンタウロスが生まれた。そのケンタウロスは、ペリオン山の激励により、マグネシア人（ペリオン山麓付近に住む原住民）の雌馬と交わり、半身半馬のケンタウロイを生んだ。〉

〈私の歌は、泡立つ海を超えて飛んで行く、テュロス（古代フェニキアの港）の商品のように；カストールを賛える調べ、その調べはアイオリス風で、汝はそれを喜んで迎え入れる、7色の音を奏でるフォルミンクス（Sandysは、これをリュラと訳している）に敬意を表して挨拶しながら。〉

カストールとポリュデウケースは双子神（双子座でもある）と呼ばれ、船旅で船のへさきに立って航海の案内をするともいわれているから、7色の音のフォルミンクスは北斗七星を暗示しているのかもしれない。

### 3. 教訓・賞賛

〈傲慢（イクシオンの例）、悪意ある中傷、狡猾な欺きなどなすべきでない。

剛勇と正義（ラダマンテュス<sup>64</sup>）に基づく行いは賞賛されるべき行為である。

人は神と戦ってはいけない、神はある時はある人の力を強め、他の時は他の人の名誉を高める。

しかし、これでさえ羨む心の持ち主は宥められない。だが、あまりにもしっかりと、「はかり紐」（はかり紐は両端に釘がついており、測量士は一方の釘を地面に刺し、紐を伸ばして測量するためのもの）を伸ばしすぎると自分自身のハートを突き刺すことになる。〉

天に向かって唾を吐くの譬えかとも思われる。

#### 4 ピュティア頌詩(3)

シュラクサのヒエロン（前482と478年騎馬競走の勝利者）

1. この頌詩は、ピュティアで、彼が持っていた名馬フェレニコスによる勝利を祝ったものである。その勝利は、Sandysによれば、二度で前482年と478年であるが、この詩は、それら二つの勝利を祝っている。

##### 2. 神話・伝説に関する部分

この頌詩は、ほとんどの部分が神話・伝説に関わっている。しかし、その割には大変わかり易い詩といえよう。したがって以下に概略を羅列してみる。

くもし、人々の祈りを代わりに語るなら、私は、死んでしまったピリュラー<sup>65</sup>の息子ケイローン<sup>66</sup>が今生き返るように祈るだろう。

彼はかつて天空の息子であるクロノスの子孫として、広く支配していた。人には優しい心を持つ、かの不気味なお化け<sup>67</sup>が、まだペーリオン<sup>68</sup>の谷間で君臨していたころ、彼はアスクレピオス<sup>69</sup>を養育していた。ケイローンは治療した四肢から痛みを取り去り、どのような病気の人にも助力を与えた。

養育する馬で有名なフレギュアースの娘<sup>70</sup>が、機が熟して、出産の女神エレイテュエイア<sup>71</sup>の助けで彼を生む前に、彼女は突然アルテミスの黄金の矢

でうたれた。そうしてハーデスの家へ、アポロンの意図によって降りて行った。〉

〈ゼウスの息子の怒りは軽々しくはなかった。なぜなら彼女は心に思い違いをし、その怒りを軽く考えていたから。以前に、長髪のポエボス<sup>98</sup>と睦みあい、神の純粋な種を身ごもっていたのに、父親に無断で別の男と結婚することに同意していたからである。〉

自分の家を辱めながら、遠くを見つめ、空しく怠惰な夢を追う愚かなものたち。そのようなのが、美しく着飾ったコロニス<sup>99</sup>の精神を強く捕えて夢中にさせた。というのは、アルカディアから来たよそ者の寝床の中で眠ったからなのだ。そのときは、神殿の王ロクシアス<sup>100</sup>は神聖なピュートーの社殿にいたけれども、彼女は目敏い神の視界から逃れることはできなかった。誤りのない後見役によって確信させられ、彼は心のなかですべての事柄を見通していた。

彼は決してひとを欺かないし、またひとや神によって惑わされもしない、行いにおいても、計画においても。だが、彼は、彼女がエラートスの息子イスキュス<sup>101</sup>というよそ者と一緒に寝たことと彼女の奔放な欺きとを知った。そこで彼は妹アルテミスを、逆らい難い力で速度を速めて（ラケレイアへ）仕置きに送った。つまり、この結婚していない少女はボーペーの湖<sup>102</sup>のそばに住んでいたからである。彼女の悪友は彼女の心を墮落させ、隣人たちを同じ目に合わせて彼女とともに滅亡させた。

しかし、血縁の人々が少女を積み薪の真ん中に置き、火の神の激しい炎が少女の周りを飛び回ったとき、そのときアポロンは語った、『その子の母親の悲運とまったく同じ時に、最も哀れな死によって、私自身の子供を殺してしまうなんて、もう私には耐えられない』彼は進み出て彼女の死体から子供を引っ張り出した。子供をそこから運び去り、マグネシアのケンタウロスに預け、死すべき人間の病気を直す術を教えてくださいるように頼んだ。〉

このようにして、助けられた子アスクレピオスは医術に長け、数々の医療

によって多くの人々を病気から解放し、やがて後世において医学の神としてまつられるようになる。

今でもアルゴス地方のエピダウロスには治療施設と並んで、医学の神様として、アスクレピオスの神殿がみられる。

### 3. 教訓や勝利者への賞賛

〈アスクレピオスはしかし、多くの功績にもかかわらず、彼の手に載せられた、素晴らしい金の報酬によってそそのかされ、死者を蘇らせた。

怒ったゼウスは雷電によって彼の命を奪った。〉と金銭による誘惑に対する罰について語るのである。

詩人は詩う、〈このようにして私は、アレトゥーサの泉<sup>41</sup>に向かって、また私の友、すなわち高貴な人々に恨みを抱かない市民に親切な王、シュラクサを支配する王のところに向かって、イオニア海を波を切って船で訪れた。彼の国に二つの幸運をもって到着した。黄金の健康とフェレニコスで獲得したピュティア競技の勝利の栄冠とキラール<sup>42</sup>で獲得した栄冠とを携えて。

まさに、母なる女神、尊敬する女王に誓願をするのは、私の望みでもあるのだが、牧羊神パンの賞賛とともに女神を賛える歌、これぞ私の玄関先で、乙女たちによって、宵にしばしば歌われる。

しかし、汝ヒエロンは、昔の格言による教訓を学ぶのに長けているから、不死の神々は、汝に運を試す機会を二度与える。これらの試練を愚かな人々は進んで耐えることはできない、しかし、いつもよりフェアに振舞うことによって高貴な人々は喜んでそれを耐えることができる。

なおもまた、汝は幸福な運命に伴われる、君主は運命によって好意的に眺められる。しかし、不運に見舞われない生活は、アイアコスの息子ペーレウス<sup>43</sup>や神様のようなカドモス<sup>44</sup>の運命とは異なるのである。

われわれは、彼等がすべての死すべき人間の最高の幸福に達したと言うことを知っているが、そのときには、彼等は黄金のリボンを頭に巻いたムーサ

イがペーリオン山の上で、また七つの門のテーバイで歌うのを聞くことができたのであった。〉

ペーレウスは、不死のテティスがピュティアで生んだ息子アキレウスをトロイア戦争で失うことになるし、カドモスは、3人の娘の不運<sup>69</sup>に見舞われることになる。

〈ひとの至上の幸福は、最大、最高に達するときにはいつも、そのまま永久に損なわれずに続くことはない。神がもし私に富の喜びを下さるというのであれば、私は、将来において高い名声を得ることを望む。

われわれは、ネストール<sup>69</sup>について、リュキア人サルペードン<sup>69</sup>について、知っている。鳴り響くように、作者が作った歌のおかげで、彼等の名前は人々の口にのぼる。

徳は、輝かしい調べによって永い生命を得るが、しかし、それらの歌の調べを勝ち取るのが易しいと思う人は少ない。〉

## 要 約

この時代を反映している面もあるかもしれないが、ヒエロンはシュラクサの王という地位にあったにもかかわらず、ピンダロスは彼を『友』と呼び、それほど詩人とそのパトロンといった関係にはなかったようである。

詩人の社会的地位は従ってかなり高かったのだろうし、ましてやピンダロスのような高名の詩人はそうだったのだろう。

この詩には、多くの神話・伝説が組み込まれているが、これらの筋書は、彼独特のものがみられる箇所があるけれども、概して古い古典的な姿をとっている。

古典的な姿というのは、アポロドーロスの「ギリシア神話」の訳者、高津春繁が、アポロドーロスの『ギリシア神話英雄伝説は一度ローマ文学、欧州近代文学を経て現代日本に紹介されたものとは異なり、峻厳であり、時とし

てあまりにも酷であり、かつ野暮なものである』と述べている、そのことである。

ここに掲げた詩だけでなく、ほかの頌詩も含めて考察すると、神話は、主に勝利者の家系に関するもの、勝利した競技場やその地域の伝説に関するもの、競技の発生に関わるもの、そしてアポロンやムーサイのごとく、もともと詩人に関わりのあるものなどの形で構成されているようである。

最も不思議に思われたことは、競技の様子など全く無視されていることと、勝利者への賞賛の言葉も格別なものではなく、むしろ、勝利者に対して将来の傲慢を戒め、さかんに神々を尊敬すべきことを説いていることである。

## 註

- (1) Sir John Sandys, THE ODES OF PINDAR, London, 1915, Rep, 1961.
- (2) Corinna, Frag. 21, Bergk; Smyth's Greek Melic Poets, pp. 69, 339
- (3) ヘロドトス「歴史」松平千秋訳、岩波書店 第七巻-154以下
- (4) 同上-153以下：ゲロンの先祖は、初めてゲラに植民した一員であったが、トリオピオン岬沖に浮かぶテロス島の出身であった。この男はロドス島のリンドス人がアンティベモス指揮下にゲラの町を創設したとき、遅れじとばかりこの植民に加わったのであった。
- (5) Sir John Sandys ;「同書」
- (6) 呉 茂一「ギリシア神話」新潮社 第四章-第二節-タンタロスの一族 p. 256以下では「金で修復」とある。
- (7) 同上
- (8) ペロピオンは現在土台の部分だけはっきりと見て取れる。
- (9) Sir John Sandys ;「同書」p. 152
- (10) 原文ではフォルミンクスと呼んでいる。はじめは3〜4弦の楽器でのちに7弦になる。
- (11) ムーサたち；ヘシオドス「神統記」廣川洋一訳、岩波書店、序詩：ヘリコン山の詩歌女神たち……彼女らの母親は記憶を司るムネモシュネ；ホメーロス「イリアス」第二歌、484：オリンポスに住まい給うムーサらよ；呉 茂一「ギリシア神話」第四章九節5：ムーサイ信仰は、オリュポス山の東に続くピエリアー、もしくはポイオーティアのヘリコン山……
- (12) 雷電はゼウスのもちもの、鷲はゼウスの使いであるからゼウスをなだめるの意。
- (13) 胸の部分がふんわり豊かに見えるように、上半身をゆったりと包み、ひだに隠れ

るように帯を締めるイオニア風俗 (ギリシア語辞典)

- (14) ヘシオドス「同書」53, 4:「彼女たちをピエリアで父神ゼウスに添い寝して生みたもうたのは……ムネモシュネ」とあるので、ピエリデスとはムーサイのことか?
- (15) ヘシオドス「同書」119:「路広の大地の奥底にある暖々たるタルタロス」奥深い地底
- (16) アポロドーロス「ギリシア神話」高津春繁訳、岩波書店 VI-3「大地(ゲー)は、タルタロスと交わり、人と獣との混合体であるチューポーンを生んだ」……乱暴を働いたので、ゼウスがエトナ山を投げつけて圧伏している。
- (17) 呉 茂一「同書」7章-2節-3:アポロドーロス「同書」E. III-27
- (18) 呉 茂一「前掲書」7章, 二節, 三
- (19) ドーリス人の法律の意
- (20) アポロドーロス「同書」第二巻VII-3:ヘラクレスに助けられてラケダイモンの王になった
- (21) ヘロドトス「歴史」七巻-165:ヒメラの独裁者であったテリロスが、アクラガスのテロンによってヒメラを追われた後、フェニキア人……らの連合軍30万をカルタゴの王アミルカスの指揮のもとにシケリアに差し向けた。……アナクシラオスはレギオンの独裁者であったが、わが子をアミルカス=カルタゴの王=に人質として送り、彼を動かして自分の舅=テリロス=の援助にシケリアへ出馬させたのである; 166:シケリアでテロンがカルタゴのアミルカスを破ったのと、ギリシア軍がサラミスでペルシア王を破ったのとは、同日の出来事だったとも伝えられる。
- (22) クロイソス;ヘロドトス「歴史」第一巻6以下多数の記述がある
- (23) Sandys;アクラガスの僭主, B. C. 570-554
- (24) 註(21)参照
- (25) ストラボン「ギリシア・ローマ世界地誌」飯尾都人訳、龍溪書舎 I-6 巻-2-3:シュラクサの市から橋一本で繋がる島オルテュギアーにアレトゥーサの泉があり、ペロポネソスのアルペイオス河と大海の地底を通して繋がっていると考えられていた。ピンダロスは「その名も高いシュラクサイの子、オルテュギア」と詩っている。  
逸見喜一郎、片山英男訳「四つのギリシア神話」—ホメーロス賛歌より—アポロンへの賛歌, 14~:ようこそ、至福なるレートー、あなたこそ名高い二人の子供の母。主アポロンと矢を降り注がせるアルテミスを、娘はオルテュギアーの島で、息子は岩なすデーロスの高い峰……  
アポロドーロス「同書」N-1:コイオスの娘たちの中で、アステリアーはゼウスと交わるのをいやがって、身を鶉(オルテュクス)に変じ、海に投身した。そして前にはアステリアーと呼ばれていた市が、のちにデーロスと呼ばれた。……レートーは……デーロスにきたってアルテミスを生み、彼女を産婆としてアポロンを生んだ。
- (26) キニュラス;ホメーロス「イリアス」第11歌-15~:アトレウスの子は大声で叫んで、アルゴス勢に出撃の準備を命じ、自らも輝く青銅の武具で身を固める。まずくるぶしに銀の金具を施した見事なすね当てをすねにつける。ついで胸には胸当てをめぐらしたが、これはかつてキニュレスが友誼のしるしとして彼に贈ったもの。



アカイア勢がやがてトロイエ攻めに出航するとの噂が拡がり、キュプロスにまで届いて、彼の耳に入ったからである。

アポロドーロス「同書」第三巻-Ⅸ-3：彼はシケリアーよりキリキアーに赴き、ケレンデリス市を建て、ヒュリアーの王メガッサレースの娘バルナケーを妻とし、キニュラー스를生んだ。このキニュラースは人々とともにキュプロスに赴いてパボスを建設し、そこでキュプロス人の王ビュグマリオーンの娘メタルメーを娶り、……アドーニス……を生んだ。

- (27) アポロドーロス「同書」摘要 I-20～：イクシーオーンはヘーラーに恋して彼女を犯さんとした。ヘーラーがこれを告げたとき、ゼウスは事の真相を知らんとして、雲をヘーラーの姿に似せて彼の横に寝かせた。そして、ヘーラーと交わったと誇っているイクシーオーンを車輪に縛りつけ、彼は空中に風によって引き回され、かくてかかる罰を彼は受けている。そして「雲」は彼によってケンタウロスを生んだ。

呉 茂一「同書」4章-3節-1 (p. 288～)：ケンタウロイは、……かの女神ヘーラーに邪な思いをかけたイクシーオーンがその祖だといわれる。

しかし、ケンタウロイのうちでも二人だけ違った生まれと、性質とを与えられていた。その一人はケイローンであるが、クロノスとオーケアニデースの一人ピリュラーとの子であるともいわれる。

- (28) ラダマンテュース；アポロドーロス「同書」第三巻 I-1：エウロペーをゼウスが恋して、馴れたおとなしい牡牛に身を変じ、彼女を背に海を渡ってクレータに連れて行った。そこでゼウスは彼女と床を共にし、女はミーノース、サルペドーン、ラダマンテュースを生んだ。

同-2. ラダマンテュースは島人のために立法者となったが、のちボイオーティアに逃れ、アルクメーネーを妻とし死後冥府においてミーノースと共に判官となっている。

- (29) ピリュラー；オーケアニデース=太洋すなわちオーケアノスの娘ら=の一人 (=ケンタウロス・ケイローンの母) 註27参照

- (30) ケイローン；アポロドーロス「同書」第一巻Ⅱ-4：クロノスとピリュラーから半人半獣のケンタウロスなるケイローンが生まれた……；註27, 29, 34参照 (沢山生まれたケンタウロスは、ほとんど野蛮で荒々しかったが、もう一人とケイローンだけは立派だったといわれる。)

- (31) ケイローンのこと；註34参照

- (32) ペリオン山；ストラボン「同書」p. 798地図：テッサリア、パガサイ (パガシテイコス) 湾の北入り江にあるヴォロス市の東約15 kmにある山、1651 m

- (33) アスクレーピオス；アポロンとプレギューアースの娘コローニスの子、註34参照

- (34) フレギューアースの娘；アポロドーロス「同書」第三巻X-3：レウキッポスは娘ヒーライエラとボイベーを生んだ。ディオスクーロイが彼女らをさらって妻とした。彼等のはかにアルシノエーが生まれた。彼女とアポローンが交わって、女はアスクレーピオスを生んだ。

しかし、一説にはアスクレーピオスの母はレウキッポスの娘アルシノエーではなくて、それはテッサリアのプレギューアースの娘コローニスの子であるという。そし

て、これによればアポローンはこの女を愛し、直ちに交わったが、彼女は父の意見に反してカイネウスの兄弟イスキュスを好み、交わったという。アポローンはこれを告げたからずを呪って、これまで白かったのを黒くし、女をば殺した。彼女が焼かれているときに火葬台より嬰兒をひきさらって、ケンタウロスのケイローンの所に連れて行き、子供は彼の所で育てられる間に医術と狩猟の技を教えられた。註27 参照：プレギューアースはテッサリア王、イクシーオンは彼の子。

- (35) 出産の女神エレイテュイア；逸見喜一郎，片山英男訳「四つのギリシア神話」アポローンへの賛歌，97：……白い腕のヘーラーはいなかった。雲を集めるゼウスの館にいたのである……。

ただ、分娩の女神エレイテュイアは何も知らず、白い腕のヘーラーのたくらみにかかり、金色の雲に包まれたオリュンポスの頂きにいた。ヘーラーは髪美しいレートーが、気高く力勝った子供を生もうとしているのにひどく嫉妬をし、エレイテュイアを引き留めていたのだ。

……出産の女神エレイテュイアがデーロスへ足を向け始めるやすぐに、分娩は始まった。

- (36) アポロンの異称のひとつ

- (37) コローニス；註34参照

- (38) アポロンの異称のひとつ

- (39) 註34参照

- (40) ボイベーの湖；ホメーロス「イーリアス」松平千秋訳，岩波書店 第二歌-711：つぎにはボイベイス湖のほとりなるベライ，グラピュライ，また堅固な町イオルコス（イオールコス）に住むものたち……

ストラボン「同書」第五章テッタリア地方の地図，p. 798：で見ると，イオルコス（現ヴォロス市）の北20 km くらいのところにある湖。現在の名はヴィヴィス湖，そのほとりにボイベーがあった。

- (41) アレトッサの泉；パウサニ阿斯「ギリシア記」飯尾都人訳，龍溪書舎 第五卷二章 p. 325：狩人アルペイオスがアレトッサに恋をしたが，彼女も狩りをしていて結婚を喜ばなかった。話によると，処女はシュラクサイに面した「オルテュギア島」まで渡り，そこで人間から泉に変わった。男も恋ゆえ川に変身した。

- (42) キラー；ストラボン「同書」第九卷三章；デルフィの南約10 km ポーキス地方の町クリサ湾岸ブレისტスの河口東側，デルフィの外港，

- (43) ペーレウスの運命；ここで強調しているのは，女神テティスとペーリオン山で結婚して，神々がその結婚式に臨席し，宴を張り，ムーサイが歌った。そしてテティスにより，勇敢なアキレウスを儲けるが，トロイア戦争で彼を失う。という運命。

- (44) カドモスの運命；アポロドーロス「同書」第三卷 I-2：……この奉仕のあとで，アテーナーは彼に王国を得せしめ，ゼウスはアプロディーテーとアレースの娘ハルモニアーを妻として与えた。そしてすべての神々は天界を去って，カドメイアにおいて宴を張り，この結婚を祝った。カドモスは妻に長衣（ペプロス）とヘーパイストスの作った首飾りとを与えた。

彼にアウトノエー，イーノー，セメレー，アガウエーの娘たち，男子はポリュ

ドーロスが生まれた。アウトノエー、イーノー、アガウエーはそれぞれ結婚したが、セメレーをゼウスが愛して、ヘーラーに秘して床を共にした。セメレーはヘーラーに欺かれ、……ゼウスは断わることが出来かねて、電光と雷鳴と共に戦車に乗って彼女の臥床に來り、雷霆を放った。セメレーは恐怖の余り世を去ったので、彼は6ヵ月で流産した胎児を火中より素早く取り上げて、自分の太腿の中に縫い込んだ。……適当な時にゼウスは縫目を解いてディオニュソスを生み、ヘルメースに渡した。

ヘルメースはこれをイーノーとその夫アタマースの所に連れて行って、少女として育てるように説いた。しかし、ヘーラーは怒って彼等を狂わせ、アタマースは上の方の子レアルコスを鹿と思って猟りたてて殺し、一方イーノーはメリケルテースを煮立った大釜に投げ込み、子供の死骸と共にこれを抱えて海底深く飛び込んだ。……イストモス祭の競技はメリケルテースに捧げられたものであって、シーシュボスがその創設者である。……

その後ディオニュソスは、各地で人々を狂わせ、アジアをまわって帰ってきた。アガウエーの子ベンテウスはカドモスのあとを継ぎ、このディオニュソスとそれを取り巻く狂乱の女たちバッケーの監視をすべくキタローン山にきたが、自分の母アガウエーによって、狂気のうちに四肢を引き裂かれた。ディオニュソスは自分が神であることをテーバイ人に顯わしてから、アルゴスにやってきた。そこでもまた彼等が彼を敬わないので、婦人たちの気を狂わしめた。ポリュドーロスはテーバイの王となり、ニュクテウスの娘ニュクテーイスを娶り、ラブダコスを生んだ。ラブダコスはラーイオスを生み、そのラーイオスは、悲劇の主オイディプースによって殺される。このように次々と不運に見舞われる。

- (45) 3人の娘とは、アウトノエー、イーノー、アガウエーである。註44参照；この3人とも、ディオニュソスの、いわゆるバッカスの狂気によって命を落とす。
- (46) ホメーロス「オデュッセイア」松平千秋訳、岩波書店 第一歌284：ピュロスへ行き、名立たるネストルに……、第三歌17、さあ、これから真直ぐに馬を馴らすネストルのところに行きなさい。……たいそう聡明なお方であるから、よもや偽りはいわれまい。「イリアス」第一歌247；弁舌さわやかなネストル……ピュロスの国の名立たる雄弁家で、……ほか
- (47) ホメーロス「イリアス」第二歌876：遙かなるリュキエ（リュキア）の、渦を巻くクサントス河のほとりからから、リュキエ勢をひきいて来たのはサルペドンと……（トロイア方）同第十二歌101；勇名轟く同盟軍をサルペドンが、副将としてグラウコスと勇猛アステロパイオスとを選んだのは、自分に次いでこの二人が他のものより格段に優れた戦士と見たからであったが、まことサルペドンこそ、全軍中抜群の勇将であった。ほか